

## 江戸川乱歩「白昼夢」における傍観者としての大衆

——有田音松征伐とチリップチャラップ節を視座として——

宮本和歌子

はじめに

江戸川乱歩が『新青年』大正十四年（一九二五）七月号に「小品二篇」のうち的一篇として発表した「白昼夢」は、「あれは、白昼の悪夢であつたか、それとも現実の出来事であつたか」（前掲「白昼夢」。以下、引用同じ）という一文で始まっている。ある蒸し暑い春の午後、大通りを歩いていた「私」は「大勢の笑顔と際立つた対照を示してある一つの真面目くさつた顔」を発見して聴聞者の一人となり、妻を殺したという男の演説に聴き入る。妻を愛するあまり殺害し、遺体を切断後冷水に漬けて保存処理を施し自分の店のショーウィンドウに飾っているという男の演説内容があまりに現実離れして信じ難く、一連の出来事が果して実際に体験したことであるのか疑っているのが先の文である。

大勢の聴衆は誰も男の話の信じていないようであつたが、「私」は男の話が本当であることを裏付ける証拠を見つけ、驚いている。ありふれた下町の日常風景の描写は、衆人環視下での大声での犯罪告白、さらには死体のショーウィンドウ展示と

いう非日常的な光景と対比をなしている。聴衆の中で唯一真実に気付いていたかのようにも見える「私」であるが、深い詮索をせずにその場を立ち去っているため、結局のところ男の妻殺しが本当だったのかは不明である。

演説をしていた男は有田ドラッグの主人であることが示唆されているが、当時の有田ドラッグは日本各地に支店を出し盛んな新聞広告によつて勢いを誇る一方、悪徳商法でも有名であつた。「白昼夢」が執筆、発表された大正十四年は有田ドラッグの悪徳商法に対する攻撃が活発化していた頃であるが、有田ドラッグの有名な詐欺的手法の一つに身元保証金目的の支店長募集があつた。「私」は男について相当教養がありそうな立派な風采だと述べているが、当時の有田ドラッグ支店長に対しては、詐欺の被害者かそうでなければ詐欺の加担者という評価が常であつたと考えられる。高い教養を備え、立派と形容されるほどの風采を保つ経済力があり、しかも情報を得やすい都市部に居住しているながら有田ドラッグの支店長募集詐欺に引っかけたというのは不可解である。

作品成立当時である大正十四年の有田ドラッグをめぐる騒動

と、「私」が迷い込んだ往来で少女たちが歌っていた「アツク、チキリキ、アツパツパア」（「白昼夢」）という歌の考察を通じ、男の主張する妻殺しが本当であったのかを誰も確かめようとしていなかったことについて論じる。

## 一、日常の中の非日常

「白昼夢」の結末部分で「私」だけが真実に気付いき、突飛な内容である上に正気を失っているかのような演説者の様子に惑わされている他の聴衆は真実に気付かなかったという解釈に読者を導こうとするものである。男と「私」、聴衆のうち、真実を正確に把握しているのは誰であったのか。考えられる可能性は二つあり、狂気の体をなして真実を語る男と狂気に隠れた真実を看破した「私」に対して男の言動を妄言として取り合わず真実を見損なつた聴衆という可能性が一つ、もう一つは堂々と妄言を演説する男の狂気に引き込まれ存在しない死体の展示を見たように思い込んで「私」と、男の狂気に引き込まれなかつた聴衆という可能性である。

読者が「私」という一人称形式で語られた内容を鵜呑みにした場合、「白昼夢」とは殺人の事実を大通りで告白していた男と狂人の妄言として男を嘲笑う聴衆、ショーウィンドウに飾られた死体に気付いた唯一の聴衆である「私」の物語であるということになる。だが、作品内には「私」の語る内容が正しいと断定する証拠に乏しい。「一面にうぶ毛が生えてゐ」（「白昼夢」）の人体模型を店先に発見したという「私」の言説を根拠に、妻を殺して二十一日間冷水に漬け、店先に飾つたという男の演説

内容が真実であつたと解釈するのは早計である。流行歌を奏する広告の楽隊とそれに合わせて歌う子供の歌声を「あれは俺のことを触廻つてゐるのだ」（「白昼夢」）と主張し、男が事実を誤認している様子が述べられ、男の認知が歪んでいることが示されているからだ。

「私」が歩いていた「ある場末」の、「見る限り何処までも何処までも、真直に続」いた「広い埃つばい大通り」には「洗いざらした単衣物の様に白茶けた商家」が並び、「埃でだんだら染めにした小学生の運動シャツ」や「砂の様な種物」、「自転車のフレームやタイヤ」など店先にそれぞれの商品を並べた「殺風景な家々」が建ち並んでいた。ありふれた殺風景な商家に挟まれて建つ二階家からは、「そんなに両方から押しつけちや厭だわといふ恰好をし」て「猥褻な三味線の音」が洩れていたとある。この二階家の「そんなに両方から押しつけちや厭だわといふ恰好」とは雑多な品々を商う家々の中にあつて若干の異質さを表し、無味乾燥な商家と夜の水商売関連と思しき艶っぽい二階家との対比を構成し、大通りを歩く「私」が混沌の世界へ進入しつづけることを告げているかのような（以上、前掲「白昼夢」より引用）。

「お下げを埃でお化粧した女の子達」の歌う「アツパツパアアアア……といふ涙ぐましい旋律」が「霞んだ春の空へのんびりと蒸発して行」く様はのどかな下町の光景を強調し、「高速度撮影機を使つた活動写真の様に、如何にも悠長」な少年達の縄跳びを眺めながら歩き続ける「私」は、群衆の注視する中で大声で殺人を告白する演説を行っている男を発見する（「白昼夢」）。「アツパツパアアア……といふ涙ぐましい旋律」の歌

は明治終わり頃に流行をみた歌であるが、なりふり構わず往来で遊ぶ少年少女の様子と併せてのんびりした日常風景を演出するのの一役買っており、後に展開されることとなる立派な身なりの男による公衆の面前での殺人告白、死体の展示という非日常的な光景との対比を強調する点でも効果を挙げている。

「こゝはお国を何百里」という軍歌<sup>(二)</sup>を奏でる「賑かな広告の楽隊」とそれに合わせて歌う子供等の声を聞いた男は、「あれは俺のことを触廻つてゐるのだ。真柄太郎は人殺しだ、人殺しだ、さういつて触廻つてゐるのだ」（「白昼夢」）と主張し周囲の聴衆は爆笑するが、「私」は男の発言内容に対して何の所存も明らかにせず傾聴を続けている。男の演説は佳境に入り、殺害した妻の遺体に施した防腐処理について述べ始めるが、男の口にした「屍蠟」という語に「私」は著しく反応している。

『屍蠟』……ある医書の『屍蠟』の項が、私の目の前に、その著者の儼くさい絵姿と共に浮んで来た。一体全体、この男は何を云はんとしてゐるのだ。何とも知れぬ恐怖が、私の心臓を風船玉の様に軽くした」（「白昼夢」）とあり、男の演説を狂人の妄言とする他の聴衆とは違い「私」は戦慄している。

人を殺害し、防腐処理を施してショーウィンドウに飾るという行動<sup>(三)</sup>は、犯罪の発覚防止のため犯罪の痕跡や証拠をできるかぎり残さないように心がける、犯罪隠匿を目指す行動に反している。殺人という重大な犯罪を自ら大声で告白したり、殺人の証拠である死体をショーウィンドウに飾つたりという突飛な行動の殺人犯がいるはずはないという思い込み<sup>(四)</sup>から、聴衆は男の話を信じず狂人としか見ていなかった。近所の住人と思しき聴衆たちは、平穩な日常生活を送っている近隣で非日常

的な殺人事件が起こった可能性など考えもしないののである。一方、何気なくウィンドウに近寄った「私」は飾られている女の顔に産毛が生えているのを発見し、男の演説が真実を述べていたと考えて聴衆の一人であった警察官にそれを告げようとするが、「実行するだけの氣力」がなかったとしてその場を後にしている。どことも知れぬ場末の商店街を偶然通行していただだけの「私」は被害者と面識があったわけでもなく、現実味のない非日常の世界で目撃した出来事に深く関与する気はなかったからである。

「私」は「何々ドラッグといふ商号を持った、菓屋の主人」である男を、「相当教養もありさうな」と形容していた（「白昼夢」）。「見覚えのある丸ゴシックの書体<sup>(五)</sup>」の「ドラッグ」や「請合菓<sup>(六)</sup>」という文字、「ガラス張りの中の人体模型」を名物とする「何々ドラッグ」という商号（「白昼夢」）の菓屋とは、大正十四年（一九二五）当時、隆盛を極めていた有田ドラッグを即座に想起させる。『ドキュメント日本人<sup>(七)</sup> 虚人列伝』（昭和四十四年（一九六九）七月学芸書林）所収の稲垣喜代志「二七セ国士・有田音松伝——日本のジキルとハイド——」によれば、有田ドラッグ創業者が大正三年（一九一四）頃に蠟細工の病理模型を作り各支店に飾らせることを思いついて以降、有田ドラッグ各店では梅毒や淋病の病菌で頭部の皮膚が侵されたり鼻が欠けたりした人体模型を店頭置くことを常としたという<sup>(八)</sup>。大正時代に頻繁に新聞広告を掲載していた有田ドラッグは誇大広告や詐欺的手法でも知られ、「白昼夢」発表直前の大正十四年（一九二五）四月頃からは『実業の世界』誌上で有田ドラッグの悪徳商法を糾弾する有田音松征伐なる活動が始ま

り、ドラッグの売り上げは短期間で激減したともある。

「白昼夢」は世間の関心が有田征伐に集まっていた頃の発表作品であるが、有田ドラッグの支店長募集と銘打った詐欺的的口も白日の下に曝され、有田ドラッグという商号を掲げた菓屋の店主に対する世間の印象は「私」が述べたような、高い教養を備えた立派な人物という尊敬を伴う見解からは程遠かったと考えられる。次章では有田ドラッグの悪徳商法と有田ドラッグに対する糾弾活動、有田征伐について詳しく述べ、本作で描かれている事件の傍観者としての大衆の姿を考える手掛かりとする。

## 二、有田ドラッグと有田音松征伐

有田ドラッグ創業者有田音松（ありたおとまつ）<sup>①</sup>の自伝『貧のたまもの』（大正六年（一九一七）十二月三有社）を参照すると、「貧苦の中に父母の血と涙もて養育せられたれば榮華に育てられたる者よりも寧ろ父母の恩を感じるの念切なるものあり、予の兄弟姉妹は九人にして予は八人目に生れ有田家を相続し」と、兄弟が多く貧しい家庭に育ったことが記されている。「自活するは父母の苦を薄うする所以なりと、（中略）郷間を辞し浪華に至り丁稚として商家に雇はれたり、時に年十四、幾度か主家を代へて具さに困苦を嘗め」たが二十九歳のとき神戸に居を据えて「身を実業界に投じ」、「爾來八ヶ年間種々の事業を経営し、明治三十六年朝鮮釜山に渡航して売菓業を営み、四十年神戸に於て花柳病専門薬房を標榜してドラッグ商会を設立し、翌四十一年商会を浪華に移し」という（前掲『貧のた

まもの』）。

「花柳病毒の蔓延を防遏し、花柳病毒に悩める數十百万の患者を苦痛より脱せしめ、惹ひて国民の元気を鼓舞せむことを期し、花柳病専門薬房ドラッグ商会を創立し、内地到る処の都市は云ふも更なり、台湾、朝鮮、満洲、南清等に支店を設置し其数二百の上に出で、製剤の額年の倍加しつゝあり、然れども未だ目的の一半だも達する能はず」（『貧のたまもの』）とあるのを見ると、有田音松は高邁な理念の下に実直な商売を展開し成功を収めたように思われるが、実際は誇大広告や悪徳商法によって全国に支店を広げていたとされている。

有田音松の生涯は、中山由五郎『変態処世術』（昭和五年（一九三〇）十一月趣味の法律普及会）に詳しい。以下、同書で述べられている音松の生い立ちと有田ドラッグ設立までを簡単に説明する。『変態処世術』では様々な詐欺や悪徳商法の手段を紹介しているが、「呆れ返つた似而国士」と題し、「天下の国士を気取つてアブク銭を捲き上げる古今無類の大天才ドラッグ商会主有田某を紹介する」として有田音松の悪徳商法を記した一章がある。同書で「彼の一挙手一投足は必ず世の中に害毒を流す」有田の悪行を記録しているのは、「或意味に於て人類学の参考品として、死後学術界に何物かを残すかも知れない」と考へてのことだという（前掲『変態処世術』。以下、引用同じ）。有田音松の自伝とは異なり、広島県三原で子沢山の末子として生まれ、十四歳で祖母の金を盗んで大阪へ出奔、約一年の間に奉公先を十軒以上変え、十七歳の時に主家の反物を持ち逃げした後、十八歳で東京行きを決意し放浪生活を送つたという。この間にいくつかの前科が付き熊本で収監された。出所後、神戸

福原にある長谷川樓の妓夫となったという<sup>九〇</sup>。

『変態処世術』では、音松の足跡についてさらに詳しく追っている。神戸福原の妓夫太郎時代には、厄介な客を撃退するために『警鐘』という新聞に似た印刷物を作ることを思いついた。

音松自身は「まるつきり無学文盲」（『変態処世術』）であったため横山という印刷屋に攻撃文の執筆を依頼し、文筆の力で横暴な客を制圧することに成功した。この一件で刊行物の威力を知った音松は目敏く攻撃対象になりそうなものを探し続け、横山に攻撃文を書かせては強請を働いたという。音松の攻撃に困り果て、神戸市参事会員の坪田十郎という人物が代表として音松と交渉し、『警鐘』の廃刊と神戸を去ることを条件に大金を渡し、朝鮮へ行くよう勧めたのだという。朝鮮行きを承諾した音松は明治三十八年（一九〇五）頃朝鮮に渡り、滞在中に知り合った人物から薬の調合を教わったことを契機に「満韓売薬商会」という薬屋を開き、誇大広告の看板によって販売を促進し儲けを得たという。先の音松自伝で語られている高邁な思想も誇大広告の一つであるが、明治四十年代に入って神戸に戻り北長狭通りでドラッグ商会<sup>九一</sup>を設立し、またも誇大広告で高邁な理想を語った。明治四十一年（一九〇八）頃から運転資金を得るため支店長募集の広告を新聞に出し、身元保証金を得るやり方を考案したという。「白昼夢」の往来で演説していた男も支店長募集の新聞広告を目にし、有田ドラッグ運転資金集めとも知らず身元保証金を出資して支店を持ったのだらう。

放天散士<sup>九二</sup>著『有田音松と野依秀一（のよりしゅういち）<sup>九三</sup> 狂か義か』（大正十四年（一九二五）五月事業之日本社）では、「全治請合薬」と銘打って必ず病気が完治すると謳う「イカサ

マ広告」を出していた有田ドラッグについて、「有田の売薬を買ってその利き目のない事に呆れた患者が沢山ある」とし、「米国では、全治を請合ふ売薬の広告は各新聞雑誌は掲載しない事になつて居るしかし日本ではまだ其辺まで広告道德が普及して居ないから、世には随分イカサマ広告が跋扈して居る。有田ドラッグの全治請合広告はその尤なるものでせう」と評している（以上、前掲『有田音松と野依秀一 狂か義か』より引用。以下、『狂か義か』と略）。前掲『貧のたまもの』のような有田音松自伝の他、頻繁に新聞広告上に掲載されていた有田音松名義の論文は、有田ドラッグ記者招聘広告を見て応募、入社した渡辺新次という人物が書いたものであったことも『狂か義か』に述べられている。『狂か義か』によると、大正十二年（一九二三）三月二十九日、上海領事館を通して日本に送還された大阪梅田に滞在中の渡辺新次は、大阪毎日新聞に載った有田ドラッグの記者招聘広告を見て応募、同年五月から「猫を被つて」（『狂か義か』）有田ドラッグ論文起草係となり、有田音松名義の論文や新聞に掲載された音松の自叙伝、種々の広告文を書いたのだという。渡辺新次は二年間音松のゴーストライターを務めた後一転して音松の下を去り、音松の旧悪を暴く投書を野依に送り有田征伐に加担している。

支店の全国展開について『狂か義か』には、「有田は支店長を募集して身許保証金を提供せしめ、その代りに薬を送る方法で資金を集めその資金が元をなして今日の成功を見た」とあり、「今日でもまだ新聞の案内広告欄を見ると支部長、支店長、会計課長などの募集広告が載つて居る、その多くのものは保証金何百円を要す、生活安定、月給二百円を給すなどの／＼地方人を

騙かすに十分／＼な巧い文句で広告して居るのが目に着く、あれ等は多くはその保証金捲き上げの魂胆であり、「身許保証金を取つて専売の薬を卸す事は少しも悪くはないのですが、その間に可なり悪辣な暴戻な所業があつたと言はれます」と解説されて居る。

新聞紙上に全治を請合う性病薬、肺病薬の広告や支店長募集広告、ゴーストライターによる有田音松の自伝や論文を盛んに掲載し、知名度を高め利益を上げていた有田ドラッグに対して次第に糾弾の世論が高まり、遂に大正十四年四月、野依秀一主宰『実業之世界』誌上で有田征伐が始まった。前掲『狂か義か』では、「他人の攻撃には妙を得て居る野依秀一、それが為めに恐喝罪に問はれて二度まで監獄に叩き込まれ、臭い飯を四五年間も食つた事のある曰く附の野依秀一が、妓夫太郎上りの有田音松征伐をやり出した」と、有田音松を攻撃する野依秀一も脛に傷を持っていたことを記している。「有田音松と野依秀一、何つちにしても／＼或意味の怪物です／＼え体の知れぬ代物同志が、喧嘩を初めたのだから、観衆は木戸銭入らずで面白い猿芝居でも見物する様な気持ちです」(『狂か義か』)と、世間には野依秀一の有田音松征伐を野次馬の立場から眺める人が少なからずいたことを伝えている。

大浜孤舟『暗黒面の社会 百鬼横行』(大正十五年(一九二六)六月新興社)では、有田音松と有田征伐の主導者野依秀一を「イカモノ界の両大関」と評し、「大正十四年の四五月頃から此の両大関取組みの大相撲が始まった、といふのは有田のドラッグを野依が例の筆法で、自分経営の雑誌上で大々的に攻撃して居るといふ事件である、売薬屋のおやぢが不正薬を売つて、

それを雑誌屋が攻撃してると思つて見れば、至つて平凡、そこに何のからくりも無いようだが、何がさて、両方共煮ても焼いても喰へない代ものだから、表面は平凡でも裏面から覗いて見れば、そこにそこあり魔法瓶、狂気じみたそのやり方が可笑しいやら馬鹿らしいやらとてもまともに、見ては居られなくなる」と有田征伐に対する感想を記している。

「原価五六十銭の月並な薬を調査して、高貴薬配合の肺病全治請合薬だなどと、勝手な熱を吹いて十円づゝもふんだくつて居る薬が、効くか効かないかは別に深く考へるまでも無かるう。

(中略) 大切な有田の秘蔵息子が肺病に犯されて居ると聞いては、その薬が、どんなものだからちやんと見え透いて居る」(前掲『暗黒面の社会 百鬼横行』)と、有田ドラッグで販売されている全治請合薬の怪しさを指摘してもいる。「イカモノ界の両大関」(『暗黒面の社会 百鬼横行』)、「え体の知れぬ代物同志」(『狂か義か』)と、異口同音に食わせ者同士の対決と評された有田征伐だが、有田征伐を主導した『実業之世界』が大いに売れたと前掲『ドキュメント日本人 虚人列伝』所収「ニセ国士・有田音松伝——日本のジキルとハイド」に記され、恰好のゴシップ材料として大衆の関心を集めていたことがわかる。『狂か義か』によると有田征伐は効果を挙げた有田ドラッグに打撃を与え、売り上げ減少を改善する良案も発案できなかった音松は大正十五年末の東京警視庁取り調べの後次男に商売を譲り、ドラッグ業から手をひいたという。

さて、「白昼夢」との関連であるが、本作が執筆されたのは有田征伐が始まり有田ドラッグの悪評が世間に周知され有田ドラッグの売り上げは激減、全国の支店長らが困窮し始めた頃で

ある。前述のように有田ドラッグ支店長は身元保証金集めのために募集しており、保証金さえ出せば教養の有無に関係なく誰でもなれるものであったことから、有田ドラッグ支店長の一般的なイメージとして高い教養を持った人物像が結びついていたとは考え難く、本作発表の大正十四年夏にあつては有田ドラッグ支店長に対して教養があり信頼のおける立派な人物という印象を抱く者は少なく、悪徳商法に加担した悪人もしくは支店長募集詐欺にまんまと引掛かったお人好しというネガティブな印象が一般的であつたと考えられる。

有田音松のゴーストライターを二年間務めた渡辺新次が大正十二年大阪毎日新聞に掲載された有田ドラッグの記者招聘広告を見て論文起草係に着任したことは先に記したが、大正十三年（一九二四）十一月まで、「白昼夢」作者である江戸川乱歩は大阪毎日新聞で広告取りの仕事をしていたことが、乱歩自作スクラップブック『貼雑年譜』で確認できる<sup>〔三三〕</sup>。有田ドラッグが頻繁に新聞に掲載していた派手な広告を目にする機会が多かつたと思われ、「地方人を騙らかすに十分」（『狂か義か』）な虫のいい話を並べ、莫大な宣伝広告費を支払って頻繁に掲載される有田ドラッグ支店長募集広告の内実を乱歩が知らなかつたとは考えにくい。男を取り囲み演説を聴いて笑つていた聴衆は、妻を殺して店先に展示したという男の主張<sup>〔三四〕</sup>を嘲笑すると同時に、ゴシツプの渦中にある有田ドラッグの悪徳商法に引掛かつたお人好しの支店長を眺め、笑つていたものであろう。一方、「私」は世間の有田征伐への関心の強さをよそにドラッグ主人を立派な人物として眺めるといふ、浮世離れした感覚を露呈している。

驚くべき内容を大声で演説する男を好奇心から観察していた聴衆は、有田征伐と称して野依秀一が始めた音松への攻撃を無責任な立場から面白がつて眺めていた大正十四年の大衆の姿に重ねることができのではないか。野依が雑誌上で主張する有田征伐の内容を鵜呑みにした人々が有田ドラッグの利用を控えた結果有田ドラッグの経営は苦しくなつたが、一連の有田征伐の中で有田音松に引けを取らない食わせ者の野依秀一への非難はさほど声高に唱えられなかつたところを見ると、大衆は真実と正義の追求よりも下劣な好奇心の充足を目的にした傍観者であり、面白がつて時折騒動に参加する無責任な立場にいたといえよう。好奇心充足を目的とした無関係な立場からの傍観は浮世離れした感覚の「私」についても該当し、「私」がウィンドウに本物の死体があると思ひながらも何も言わず立ち去つたのは、事件を解明し真相を究明しようとする探偵と異なり、「私」はその場限りの好奇心で男の演説に耳を傾けていたからである。

「私」を含む聴衆は一時的な好奇心が充足されれば満足し、誰もそれ以上の事実追究を試みていない。彼等にとつて妻殺しを往來で告白していた男は日常における非日常との遭遇以上に意味はなく、男の演説の真偽がどちらであろうと各自の日常生活にさほど影響はない。平穩な日常を乱してまで積極的に他者の世界に踏み込む気のない人々にとつて、日常生活にかかわりのない場所で起こつた出来事はしばしの観察対象にしかならない。「木戸銭入らずで面白い猿芝居」（『狂か義か』）を傍観した後には満足し、それぞれの日常に戻つていく。真実の追求を重視せず見世物としか捉えていない人々が重大事件の片鱗を目撃し

たとしても、観覧時間終了に伴い事件も閉幕して絵空事と帰し、それが真実か否かなど考えようとしないのである。

三、チリップチャラツプ節またはりゅうせい節について

ものがなしい節回しの「アツパツパア」という歌詞が空に響く様は、のんびりした午後の町を強調する効果を挙げている。この歌は、明治四十二年（一九〇九）頃に流行した歌として複数の資料に見えてくる。越中席床松『当世流行歌』（明治四十二年九月石塚書舗）には「チリップチャラツプ」として、多くの歌詞が紹介されている。

○月に村雲花には嵐、主に浮気のくせがある、チリップ、チャラツプ、アツパツキキリキ、アツパツパ、りうせい／＼、アツパツキキリキ、チャー。

○惜しき筆止め先づあら／＼と、用事ばかりに候かしこ、チリップ、チャラツプ、アツパツキキリキ、アツパツパ、りうせい／＼、アツパツキキリキ、チャー。

○さへたやうでも又すぐ曇る、心ほそきは秋の月、チリップ、チャラツプ、アツパツキキリキ、アツパツパ、りうせい／＼アツパツキキリキ、チャー。『当世流行歌』

この三種に続き十九種もの歌詞が挙がっているが、「チリップ、チャラツプ（中略）アツパツキキリキ、チャー。」はいずれにも共通しているので、前半部分のみを掲出していく。

○波にゆらるゝあの月影は、離れながらも円くなる。（以下略）

○水も寝しつむ丑満頃に、恋の真昼のさしむかい、（以下略）

○せけばせくほどアレ憎らしい、妾をぢらすよ、不如帰、（以下略）

○お前ひとりと定めたからは、浮気しもせぬさしもせぬ、（以下略）

○逢ふてうれしや別れのつらさ、逢ふて別れがなけりやよい、（以下略）

○雪はちら／＼待つ夜は長し、エ、モウじれつたい茶碗酒、（以下略）

○まゝにならぬが浮世の習ひ、辛棒する木に花が咲く、（以下略）

○咲くのが花か咲かぬが花か、咲く間待つのが花の花、（以下略）

○他所の浮気の話をつ（それ）と、言はず語らずあてこすり、（以下略）

○花はいろ／＼五色に咲ど、主に見返る花はない、（以下略）

○義理と人情と人目がなけりや、放して只おく人ぢやない、（以下略）

○口ぢや言れず仕打ちや出来ず、おれて塞いで癪の種、（以下略）

○一里二里なら諦めましょが、僅か二三町がまゝならぬ、（以下略）

○徳利ぶら／＼赤垣源蔵、月のあかりで袖しぼる、（以下略）

○異見聞きつゝ暈へ指で、主のかしら字書て居る、(以下略)

○愔気で妾しは云ふではないが、主の浮気は何故やまぬ、(以下略)

○右に血刀左に手綱、くらの前にはロスの首、(以下略)

○思ふ半分文にもかけず、逢へば猶更云はれない、(以下略)

○梅と桜の色香をくらべ、中にすました糸柳、(以下略)〔当世流行歌〕

藤澤衛彦『流行唄変遷史』(大正三年(一九一四)九月有隣洞書屋、以下、引用同じ。)には、明治四十三年(一九一〇)頃流行の「ちりつぶちやらつぶ節」が収録されている。

ほんに否だよ夜明の鐘と、借りたお金とこの気兼、ちりつぶちやらつぶちりつぶちやらつぶ、あつぷくちきりきあつぱつぱ、りうせん／＼あつぷくちきりきちや。『流行唄変遷史』

「ハイカラ節は、一転化して、ちりつぶちやらつぶ節となった」(『流行唄変遷史』)と、「ちりつぶちやらつぶ節」はハイカラ節から派生したという説明がある<sup>(下五)</sup>。高野辰之、大竹舜次編『俚謡集拾遺』(大正四年(一九一五)四月六合館)附録「明治年間流行唄」にも「ちりつぶちやらつぶ節」の歌詞が多数報告されているが、いずれの場合も『当世流行歌』同様、後半部分の「ちりつぶちやらつぶ(中略)あつぷくちきりきちや」が共通している。

○ほんに否だよ夜明の鐘と、借りたお金とこの気兼、ちりつぶちやらつぶちりつぶちやらつぶ、あつぷくちきりきあ

つぱつぱ、りうせい／＼あつぷくちきりきちや。

○主に叩かれ顔打眺め、涙ふきつゝ側に寄る、(以下略)

○すねて背中を合してみれど、聞かしたも明の鐘、(以下略)

○名残おしさを口へは出さず、じつと押へし帯のはし、(以下略)

○東白むに灯をかき立てゝ、せめて逢ふ夜を延したい(以下略)

○さうした邪見と初手から知れば、かうした苦勞はしやせまい、(以下略)

○義理と人情の峠を越せば、これから出雲へ何里ある、(以下略)〔俚謡集拾遺〕所収「明治年間流行唄」

「りうせん」が「りうせい」に変化している他は『流行唄変遷史』とほぼ同じ歌詞が一番最初に挙げられ、その後様々な歌詞が続いている。実に多くの歌詞が存在していたことがわかるが、いずれも男女の色事における駆け引きや心情を描写した卑俗な内容である。この他、明治、大正期の流行歌を楽譜付きで紹介した、東京上野音楽会『近世俚謡歌曲集』(大正四年九月盛林堂)には、大正前後の流行歌として「りうせい節」が収録されている。その歌詞は、次のとおりである。

うめとさくらのあおばのふえを つきがふくのかほととぎす チリツプチリツプチヤラツプアツクチキリキアツパッパ リュセイリュセイアツクチキリキヤン

風雅な情景を歌っている前半に対し、後半の無意味な語の羅列は『流行唄変遷史』、『俚謡集拾遺』とほとんど同じである。『流行唄変遷史』所収の歌詞にみえる「りうせん」ではなく、

『俚謡集拾遺』所収の歌詞に同じ「リュウセイ」という語が入っており、タイトルはこれに由来するものと推測される。日本コロムビア株式会社『決定版 恋し懐かしはやり唄』（平成二年（一九九〇）のCDには本篠秀太郎の歌う作詞・作曲者不明「チリップ節（隆盛節）」が収録されている。付属の解説書記載の歌詞をここに記す。

梅と桜の青葉の笛を 月が吹くのか時鳥 \*チリップチリップ／＼アップクチキリキアパッパリュウセイ／＼アップクチキリキチャー

ほっと溜息つく／＼眺め 残る写真が癪の種 \*くりかえし

義理と人情の峠を越せば これから出雲へ何里ある \*くりかえし

一番の歌詞は『近世俚謡歌曲集』所収の「りゅうせい節」と、三番の歌詞は『俚謡集拾遺』所収の「ちりつぷちやらつぷ節」の最後の歌詞と一致している。南葉二による解説では、「明治四十二年ごろから東京の花柳界からうたいだされたもので『チリップチャラップ アップクチキリキアパッパ リュウセイ リュウセイ アップクチキリキチャー』というユーモラスなはやしがタイトルになり、大いに受けたもの。『ホッと溜息つく／＼眺め残る写真が癪の種』など色恋を歌ったものが多く、そのほとんどは、都々逸の文句を借用して、前記のはやしをつけたものだった」（日本コロムビア株式会社『決定版 恋し懐かしはやり唄』解説書、平成二年（一九九〇）と説明されている。

『流行唄変遷史』、『俚謡集拾遺』、『近世俚謡歌曲集』、『決定

版 恋し懐かしはやり唄』解説書の四点から歌詞を引用したが、それぞれ一致する文句を含む一方で多数のヴァリエーションがあり、チリップチャラップ節またはりゅうせい節の流行のほどが窺える。「白昼夢」の作中で少女たちが歌うチリップチャラップ節の前半の歌詞としてどのようなものを乱歩が想定していたのか不明であるが、「ちりつぷちやらつぷあつぷくちきりきあつぱつぱ」という意味のない特徴的な文句が後半で歌われるのがチリップチャラップ節、りゅうせい節であって、前半の歌詞に関して定型とされるものは特に存在しなかったか、過去に存在していたとしても広く歌われるうちに失われていたと見るのが妥当であるため、前半の歌詞の内容がわからないことはさしたる問題ではないだろう。

「白昼夢」に描かれている夢か現実か定かではない「私」の見聞譚は、「イカモノ界の両大関」の対決で世間の耳目を集めていた有田音松の有田ドラッグと無聊を慰める目的で自由に歌詞を改変し広く歌われたチリップチャラップ節への言及によって、一時的な好奇心の充足と愉悦を得て満足する一方で真相究明には無関心な大衆の性質が印象付けられ、男の演説の真偽確認に無関心であった「私」を含む聴衆の傍観者としての立場が明確にされているといえる。

おわりに

殺人と死体展示の手口を衆人の前で告白する男、殺人の事実を大声で演説する正常な人がいるはずがないと信じて男の話を取りあわない聴衆、男の話が真実であると見抜いたかのような

「私」という三者三様の様子を通じ、公衆の面前に置かれた犯罪の証拠を見逃す凡人、犯罪の証拠を見逃さなかった目敏い「私」の対比が書かれているように見える本作について、有田音松経営の有田ドラッグとそれに対する糾弾運動である有田音松征伐、チリップチャラップ節と関連づけて述べてきた。「私」はショーウィンドウの中に本物の死体が飾られている可能性を提示しながらもそれ以上の事実追求を行わなかったため、「私」の語りによってしか情報を得られない読者は真実を知る機会を永久に失っている。「私」も他の聴衆も、妻を殺害したという男の告白が真実か否か各々の生活を犠牲にしてまで確かめる気を持たなかった点において同類である。事件の傍観者たちが犯罪の証拠を発見したとしても、積極的に関与し深追いをする気がない彼等にとつてどれほど残酷な犯罪であろうとも日常の中でふと垣間見た非日常的な出来事に過ぎず、「私」も聴衆もどのかな日常の中でひとときの非日常を体験し、充分満足して再び各々の生活へ戻っていく。どのような事件が起ころうとも、己の日常生活を脅かす性質の事件でなければ無責任な立場から楽しく眺める対岸の火事であつて、真実の追究は関心の対象外なのである。

「江戸川乱歩「人間椅子」論——エログロという評価と心理的盲点——」（平成二十八年（二〇一六）三月京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学国文学論叢』第三十五巻）において、無意識に行われていた情報の取捨選択を自覚し新たな知見を得るまでの様子を乱歩は多数の作品に描いていたと述べたが、「白昼夢」では情報の取捨選択を無意識に行っていることに気付かず新たな知見を得ることも価値を見出さず、目前

の好奇心充足で満足する大衆を描いている。江戸川乱歩は、常人であれば見過ごすであろう些細なことを手掛かりに謎を解き事件を説明する、明智小五郎に代表される名探偵の登場する作品を幾つも書いているが、この「白昼夢」は名探偵とは正反対の、真実の追求と謎の解明に無関心な人々を描いたものである。作品に登場する有田ドラッグ、チリップチャラップ節のどちらも普及の末に本来の姿があまり知られないまま庶民の日常に浸透していた事物ということができ、利根的な享楽を求め野次馬根性による傍観者の立場に満足する大衆の姿をより印象付ける効果を挙げている。

〔注〕

(一)「戦友」という題のこの歌は、本文掲『近世俚謡歌曲集』にも収録されている。

(二) 殺害した人間の身体を人目につきやすい場所に展示する手法は、「蜘蛛男」（昭和四年（一九二九）八月）昭和五年（一九三〇）六月『講談倶楽部』に多く登場しているほか、「緑衣の鬼」などの作品でも用いられている。

(三) 江戸川乱歩「透明の恐怖」（昭和三十一年（一九五六）十月『別冊芸芸春秋』）において、すぐ近くにいる、もしくはあるにもかかわらず頑迷な先入観のため存在が認識されず誰も気づかない状態が心理的盲点であると説明されている。「白昼夢」でいえば、死体がすぐ目の前にあり、殺人犯が自ら殺人を告白しているにもかかわらず、殺人犯がこのように大それたことをするはずがないという先入観から、聴衆は心理的盲点に捉われていたということになる。

有田ドラックの「毒いば」は、  
朝日新聞に掲載された有田ドラック  
の「毒いば」は、朝日新聞に掲載された有田ドラックの「毒いば」

# 毒いば

請合薬に付  
有田ドラック  
開東役賣元  
大正十三年三月三十日

(四) 大正十三年(一九二四)年三月三十日大阪

朝日新聞に掲載された有田ドラック広告の一部。丸みを帯びた書体で「請合薬」、「りん病」、「ばい毒」と記されている。

(五) 全治を請合う薬という意味で、有田ドラック

は宣伝の際に全治請合薬、請合薬という語を使用していた。本文掲『変態処世術』の「請合薬とは斯んなもの」という章には、有田ドラックでは原価五、六十銭程度の薬を十円の価格で販売していたこと、ほとんど変わらない内容の薬を並製薬、特製薬とランク分けし、倍の値段をつけて販売していたことが記されている。ほとんど内容の変わらない十円の特製薬がよく売れた理由について、「病人の心理状態は変なもので、高い薬は能く駛くと先方様で勝手に決めて呉れ」、「患者は軽い財布を叩いて特製を買」つたと解説している。「富山の薬屋さんの梅毒薬も、有田の請合薬も、其の内容は少しも変らない。強ひて変わったことを求めると定価が飽棒に高いだけ」(『変態処世術』)とあり、薬の成分や配合ではなく広告の内容が悪質であるとして問題視されていた。

(六) 末次良輔『商店の経営と広告』(大正十五年(一九二六)十月末次良輔商店クラブ社)の「有田ドラック商会の店頭」という節では、「有田ドラックの広告は実に素晴らしく盛ん」と

新聞や雑誌の広告、町中の看板や電燈広告の多さを述べながらも、

「アレ丈けの莫大な広告費を使ふなら、もつと〜より以上に効果のある広告法が他にいくらもある」としながらも、「有田ドラックのやり方で私の本当に感心したのが一つある。それは外でもない、あの店頭の標本陳列である」と、店頭の人体標本が挙げられる商売上の効果を認めている。「普通の店頭を構へたならば、薬を買ひたがつてゐる人々でも、人目を憚つて容易に店内へ這入らない」が、「標本が店頭に陳列してあるために、裏面はその標本を見るために店頭に居るやうに見せ掛け、ソツト店内に這入つて薬を買」い、「又ソツト出て標本を見て済した顔で店頭を出」ることができ、外聞を憚る病氣でも往來の人々に悟られることなく安心して薬を購入できるからだという(『商店の経営と広告』)。

(七) 『ドキュメント日本人 虚人列伝』(昭和四十四年(一九六九)七月学芸書林) 所収の稲垣喜代志「ニセ国士・有田音松伝」——日本のジキルとハイド——には、有田音松の生年は慶応三年(一八六七)四月十八日とある。

(八) 表紙には「七転八起著 貧のたまもの」というタイトル、著者名の他に多数の達磨の絵と「不倒不屈」という語が記されている。本文冒頭には「貧のたまもの」というタイトルに続けて副題と思しき「富貴の家に生れしは幸か不幸か」という文句と、著者として有田音松の名が記されている。

(九) 注(七) 掲「ニセ国士・有田音松伝——日本のジキルとハイド——」によれば有田音松が妓夫として福原に住み込んだのは二十六歳の時で、「この福原時代のことについては音松の自伝では一切はぶかれている。おそらく彼の生涯の中でこの時代は恥部にあたる時期である」とある。

(十) 本文掲『変態処世術』には、有田ドラック商会の「ドラック」について「片仮名で書いてあるからと云つて、決して英語でも仏蘭西語でも無い。実は「道楽」といふ言葉を少し替へて片仮名で書いたに過ぎない」という説明がある。しかし、注(四)で掲出した広告の一部でも確認できるように、新聞広告や看板で「有田ドラック」と記していることから「ドラック」ではなく「ドラッグ」が正しいと考えられ、道楽をもじつてドラックと命名したとする説は信憑性に欠ける。

(十一) 奥付には著者として「東京府下吾嬭町字小村井一五八番地 保刈長治」と記されている。同書巻頭の事業之日本社副社長小阪登弘による序には、「本書の著者放天散士は年来の友人である。僕に原稿を見せて、事業之日本出版部から刊行して呉れと云つて来た」(『狂か義か』とあるが、大正十四年(一九二五)五月という刊行年月と出版元が事業之日本社であることを考えると、野依秀一主導の有田音松征伐の宣伝を目的として出版された可能性がある)。

(十二) 注(七)掲『ドキュメント日本人 虚人列伝』所収梅原正紀「野依秀市の混沌」によれば、明治十八年(一八八五)大分県生まれである。雑誌『三田商業界』を『実業之世界』と改題して発行人部数を伸長させ、大正十年(一九二二)に雑誌『真宗之世界』昭和七年(一九三二)『帝都日日新聞』を創刊、昭和四十三年(一九六八)東京都で没している。昭和四年(一九二九)からペンネームである秀一に替えて本名秀市(ひでいち)名義を使用するようになったという。本文掲『狂か義か』では、「牢に入った事以外は生涯が頗る順調」、「虚業家として天下の尤たるものであるが、事業家ではない」、「雑誌の上でずる分多くの人を弁難攻撃し、再

度入獄の苦を嘗め」てきたと評されている。

(十三) 江戸川乱歩『貼雑年譜』完全復刻版(平成十三年(二〇〇一)三月東京創元社)によると、父親の伝手で大阪毎日新聞社に入社し、大正十二年(一九二三)七月から大正十三年(一九二四)十一月まで広告部外交として勤務したという。「月給八十四円デアツタガ、外ニソノ月ニ取ツタ広告料金ノ五分(デアツタト思フ)ノ手数料ガ貰ヘルノデ収入ハコレマデニナイ豊カサデアツタ」、「最初ハ大イニ成績ヲアゲテ腕利キノヤウニ見ラレタ」と、多くの広告を取る有能な外交部員であったことが記されている(前掲『貼雑年譜』完全復刻版)。

(十四) 後年江戸川乱歩が発表した長編作品「蜘蛛男」(昭和四年(一九二九)八月)昭和五年(一九三〇)六月『講談倶楽部』には、一般的な募集条件とは逆の条件を提示している新聞に求人広告を出し、知性の乏しい怠惰な若者を雇って犯罪の片棒を担がせる悪人が登場する。彼は美術用模型の見本と偽り、雇った若者に指示して石膏で固めた人体をあちこちに配らせるが、一人の若者が指示に背いて美術商に模型を売り払い、本物の死体であることが発覚している。この悪人は事務員募集という新聞広告によって好みの女を探す一方で犯罪学の権威に化け、ありふれた新聞広告をよく観察して犯罪を看破することの重要性を説いてもいる。ショーウインドウに飾られた人体模型は「白昼夢」と同じ着想であり、昭和三十三年(一九五七)の長編「魔法人形」でも言及されるなど、しばしば乱歩作品に登場する手段である。また、「蜘蛛男」登場の悪人が新聞広告を巧みに駆使する様は、有田ドラッグの有田音松を強く想起させる。

(十五) 本文掲『流行唄変遷史』によれば「ハイカラ節」は明治四十

一、二年（一九〇八、一九〇九）流行で、「一名自転車或は又、ハイカラ自転車節ともいふ」と説明されている。ハイカラ節としてお茶の水高等女学校や日本女子大学、上野音楽学校などの女生を歌った歌詞が流行していたようであるが、「本唄？」という注記を付して紹介されているのは、当時目新しかった自転車に危なしく乗る男を歌った歌詞である。

〔付記〕

引用文は原則として初出により改行は斜線で示し、通行の字体を用いて適宜ルビを省いた。

（みやもと わかこ・京都女子大学非常勤講師）